

## 時間を表す名詞の文末用法

——「時だ」「時ではない」の評価性について——

李 二 維

### 1. はじめに

従来の研究において、時間を表す名詞「時」は時間状況を指定する副詞的従属節を構成する要素とされている。主に「～時、～（主節）」「～時に、～（主節）」「～時には、～（主節）」の形で、従属節と主節の事態の成立がほぼ同時であることを表す主要な形式の一つとして議論されてきた。「～時」「～時に」「～時には」の形式の使い分け、従属節と主節の述語の時制問題をめぐる研究が多く見られる。「～時」「～時に」「～時には」の使い分けについては寺村（1983）が以下のようまとめている。

「P トキハ Q」が最も適当なのは

(イ) P 時 Q が一般的な決まりを表しているとき。

(ロ) 一回きりの事象でも、Q がある状態を表しているとき。

「P トキニ Q」が最も適当なのは一回きりの事態発生を報告する文の場合である。

「P トキ Q」上のどの場合にもほとんど使用可能だが、特に話し手がまず P という事態を述べ、次にそれに続いて起こったことを、いわば発見として述べる場合にはこの形が最も適当である。

寺村（1983）p263

また、従属節と主節の述語の時制問題について、日本語記述文法研究会編（2008）『現代日本語文法 6 第11部複文』では、

従属節の述語が動きの過程をもつ動作動詞の場合、スル形では主節の事態の成立する時間は従属節の事態の成立する時間の直前、または同時であることを表し、シタ形では直前・直後または同時、シテイル形、シテイタ形の場合は同時であることを表す。

『現代日本語文法 6 第11部複文』 p171

のようにまとめている。

しかし、上記のような従来の研究で盛んに取り上げられる時間節を構成する「時」と違って、例のように「時」が文末に出現する場合も見られる。

(1) 自分が何者であれ、今はただ己の信念を貫く時である。

(BCCWJ Yahoo! ブログ2008)

(2) 胸がどきどきしていまにも気絶しそうだ。しかし、今は自分の身を心配している時ではない。

(BCCWJ アン・ヘリス (著)『名誉の問題』2001)

上記の例では、「時」は文末に現れ、前述した時間状況という意味にならず、「転機は二十五歳の時だ」のように、普通名詞として単なる時間を指定する用法でもないように思われる。このような「時」が文末に述語として出現する場合は、

(1') 今はただ己の信念を貫くべきである。

(2') (前略) 今は自分の身を心配しているべきではない。

のように、基本「べきだ」に言い換えることが可能で、事態に対する評価の意味が含まれるように思われる。そこで、本稿では、「時だ」「時ではない」を「時」の文末用法と呼び、その意味用法を分析し、価値評価を表すモダリティ形式として位置づけることを試みたい。

こうした「時」の文末用法に関する研究は、管見の限りあまり見当たらない。その中で田中(2012)は「時だ」の意味用法のまとめとして、

事態や事象がこれから発生する、または発生した時点での周囲への気付け、注目表示として機能する。…何かをなす際の当然の時間帯、喫緊の事態を指す事が多く、しばしば『今こそ』、『いまや』などの副詞、『べき』などの助動詞を伴う。…(中略)〈時だった〉は話し手の回想、想起をともしつつ話題になっている状況や内容に言及する際に用いられる。

田中(2012) p228

のように記述している。しかし、田中(2012)は「時だ」を「時間だ」と同様に、特定の時間を指示する表現として、時間を「特化」する用法であると主張する。従来の研究と違って、時間節としての用法ではなく、「時だ」構文に着目するのは評価できるが、「時だ」に対する分析では「時」の実質名詞意味の説明にとどまり、ただの時間名詞を述語とする文として取り扱って、評価の意味については視野に入れていないし、「時ではない」についても触れていない。文末用法の「時だ」に対して、新しい視線での考察が必要である。

## 2. コーパスから見る「時だ」「時ではない」の使用状況

そこで、本稿では『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(BCCWJ)を利用し、「時」の文末用法「時だ」「時ではない」の意味用法を見ていく<sup>(1)</sup>。

また、BCCWJから抽出した例文数が少ないため、「朝日新聞クロスサーチ」より以下の条件で検索し直した。検索範囲は1985年から2022年までの全期間の記事、検索対象は見出しと本文と補助キーワード、検索キーワードを「時だ」(異体字、同義語を含む)、対象紙誌を朝日新聞、朝日新聞デジタル、アエラ、週刊朝日にして、30782件のヒットからランダムに3000件を抽出し、そのうちの806件を文末用法と認定し、分析した。「時ではない」について同様の検索方法で<sup>(2)</sup>1380件のヒットから目視によってそのうちの417件を文末用法と認定し、分析した。本稿で利用するコーパスの用例を表にまとめると以下ようになる。

表1 BCCWJ「～時だ」の前接成分

前項	例文数
動詞ル形	56
動詞すべき	31
その+時だ <sup>(3)</sup>	10
その他のモダリティ形式 <sup>(4)</sup>	13
計	110

表2 「朝日新聞クロスサーチ」(1985年-2022年)「～時だ」<sup>(5)</sup>の前接成分

前項	時だ	時ではないか
動詞ル形	213	305
動詞すべき	67	160
動名詞+の+時	27	9
その+時だ <sup>(6)</sup>	6	3
その他のモダリティ形式 <sup>(7)</sup>	5	11
計	318	488

- (1) 「時だ」の検索条件は以下の通りである。「キーを指定しない、後方共起条件はキーから1語の語彙素が『時』、キーから2語の語彙素が『だ』とし、3536例ヒットした。目視によって時刻表示や文末での述語でない用法等を排除し、文末用法と認定できるのが110例である。複文に出現する用例等、厳密には文末用法ではないものも含む。一方、「時ではない」に関しては検索条件を「キーを指定しない、後方共起条件はキーから1語の語彙素が『時』、キーから2語の語彙素が『で』とし、1795例ヒットし、目視によって、そのうちの39例を文末用法と認定し、本稿の分析対象とする。
- (2) 上記「時だ」と同様の検索条件で、キーワードを「時ではない」にして用例を抽出した。
- (3) 「いつかはアメリカに戻ろうと思っていたから、今がその時だと思ったんだ。」のように、前文脈に出現した動詞を指す場合である。
- (4) 「なければならない・なければならぬ時だ」計10件、「なくてはならない時だ」2件、「ないといけない時だ」1件。

表1、表2からわかるように、文末用法「時だ」の前接成分として動詞ル形が最も多く、「動詞すべき時だ」の例文も多く見られ、特徴的である。

表3 BCCWJ「～時ではない」の前接成分

前接成分	例文数
動詞ル形	7
動詞テイル形	17
動詞すべき	8
その他 <sup>(8)</sup>	7
計	39

表4 朝日新聞クロスサーチ「～時ではない」の前接成分

前接成分	例文数
動詞ル形	165
動詞テイル形	154
動詞すべき	42
動名詞	30
その、そういう	22
その他 <sup>(9)</sup>	4
計	417

また「時ではない」は「時だ」と異なり、表3、表4のように「する時ではない」「している時ではない」の両形式がある。このようにコーパスから抽出した用例の分析を通じて「時だ」、「時ではない」の構文的特徴を以下のように考えられる。

- 
- (5) 否定疑問形式の「時ではないか」「時ではないだろうか」等も「時だ」に入れている。また、形容動詞「～が必要な時だ」の例も見られるが、別稿に譲ることとする。
  - (6) 「その時だ」の形式は「『ゴーン氏が長期間業務に携われないなら、新しい段階に進むべきだと言ってきた。今がその時だ』と述べ、仏ルノーに初めて解任を求めた。」のように、「その」によって文脈に出現した動詞を指示するものである。意味的には、動詞が前接する「進むべき時だ」に一致すると考えられるため、表にまとめたのである。
  - (7) 少数ながら、「～しなければならない時だ」「～しないとイケない時だ」「～しなければならない時ではないか」、「～しなくてはならない時ではないか」「～してもいい時ではないか」「～してよい時ではないか」の用例も見られる。
  - (8) 「その時」ではない、「あの時ではない」、「そういう時ではない」の形で、文脈から動詞を指定する例文のことである。
  - (9) 「高邁な理念や哲学を唱えていられるような時ではない」のように「ような時ではない」の例文のことである。

### 3. 「時だ」「時ではない」の前接動詞と現場性

#### 3.1 「時だ」「時ではない」に前接する動詞の形態

コーパスから見る「時だ」「時ではない」の使用状況からわかるように、テンスの観点からすると、「時だ」に前接する動詞はスル形をとり、「時ではない」に前接する動詞はスル形、シテイル形をとり、いずれにしても過去テンスのタ形が現れることがなく、両形式の前接成分にはル形とタ形の対立がない。これは、「時だ」も「時ではない」も森山（1997）で主張する「未実現事態についての選択に関するコメント」を表す表現としての現れだと思われる。

(3) 今はAする時だ。(もう)Bしている時ではない。

(4) 今はCしている時ではない。Dすべきだ。

のように、「A」事態を主張する場合、発話時点まで継続している「Aと対比になるB」事態の存在が想定できる。「(もう)B時ではない。」が明示されなくても、潜在的なものとしてB事態が想定可能である。同様に、「Cしている時ではない」という否定評価の後文脈に「Dすべきだ」のように適切な事態選択の提示が自然に現れてくる。

このように、「時だ」「時ではない」には範列関係にあるその他の事態が顕在的であれ潜在的であれ、その想定が可能なのではないだろうか。「時だ」は取るべき事態を、「時ではない」は取るべきでない事態を選択関係の中で位置付けての価値判断だと言える。言うまでもないが、事態の選択というのは、現在或いは未来の事態しか選択することができない。「時だ」の「時」は未実現事態においてのトキを表し、「時ではない」の「時」は現在進行中或いは未実現の事態を表す。前接する動詞にル形とタ形の対立がないのは、まさに未実現事態についての選択を評価する表現であるためと思われる。では、このような「時だ」「時ではない」はどんな特徴があるのか。

#### 3.2 「時だ」「時ではない」の現場性

まず、現場性という観点から、この構文を検討してみたい。

(5) 育児が大切だっていうことは、よく分かっています。今は一生懸命に育児をする時だって、自分に言い聞かせて頑張っています。

(BCCWJ 大日向雅美 (著)『子育てがづらくなったらとき読む本』2001)

(6) おやめなさい。夫婦喧嘩は犬でも食わぬというじゃありませんか。それに、今喧嘩しているときではないのです。国守様をできるだけよくおもてなしなくてはならないときです。

(BCCWJ 梅原 猛 (著)『梅原猛著作集』2003)

では、「今～する時だ」「今～ときではない」という名詞述語の文となっている。それぞれ発話時点において必要なこと、不適切なことを述べる意味となっている。

ただし、厳密な「今」が取り上げられるわけではない。

(7) 「当時のことは忘れてはいけませんが、悲しみに沈んでばかりいられないです。これからは、前を向く時だと思います」と眞由美さんは言い、願う。

(朝日新聞クロスサーチ2021年05月03日 朝刊)

のように「これから」など近未来のことを問題にする場合もある。

おもしろいことに、コーパスから抽出した例文から見ると、「今」の伴う例文は数多く見られる。具体的には、BCCWJより抽出した文末用法「時だ」の全110例のうち、「今～時だ」「今は～時だ」「今が～時だ」「今こそ～時だ」の例文が計54例見られ、「時ではない」の全39例中「今は～時ではない」は24例見られる。また、朝日新聞クロスサーチより抽出した文末用法「時だ」806例<sup>(10)</sup>中「今こそ～時だ」「今が～時だ」「今は～時だ」は231例見られ、「～時ではない」417例中「今～時ではない」「今は～時ではない」は146例見られる。

また、「今」が明記されなくても、

(8) 今、自動車産業は生産が増え続け、世界の各社がしのぎを削っている。(中略)自動車業界にも業界組織はあるだろう。ならば、信頼回復のためにも、他社との協調を考える時ではないだろうか。

(朝日新聞クロスサーチ2017年11月02日 朝刊)

のように、「考える時ではないだろうか」において「今は」に相当する主語はないが、前文脈には「今」の状況が述べられており、それも含めて「他社との協調を考える時ではないだろうか」という述語が、「今必要なこと」としての叙述となっている。

「今」の状況ということは、次のように「ここ」で表される場合もある。

(9) もはや学校任せで現状が変わらないのは明らかだ。(中略)労務管理を現場にゆだねる対策は効果が限定的だ。ここは政治や行政が動く時だ。

(朝日新聞クロスサーチ2022年04月15日 夕刊)

話し手が「時だ」「時ではない」と発話するに当たって、その判断に至るまでの場面・状況を説明する文脈が常に存在することに注意したい。(9)では前文脈に「効果が限定的だ」は「政治や行政が動く時だ」の原因である。他にも「～中」「～の中で」によって発話時の場面・状況を表す用例も見られる<sup>(11)</sup>。

このように、特定の背景・場面状況を説明する文脈が大きな原因や契機となり、「時だ」によって、この特定の場面・状況下において実現すべき事態を提示するという文連続が導きだせるよう

---

(10) 「時だ」「時ではないか」の合計例文数である。

(11) 文化伝承に携わる若手が減るなか、関東だ東北だどこだわっている時ではない。鷹同士、力を合わせていきたい。(朝日新聞クロスサーチ2014年10月27日 朝刊)

国難の中で派内で闘争している時ではない。(朝日新聞クロスサーチ1998年08月29日 朝刊)

に思われる。場面・状況の文脈の存在が前提であることと同時に、「時だ」は「時」の語彙的意味を受け、事態を実現するタイミングという意味は色濃く存在するため、他にも、

- (10) 今や日本的感性が世界に貢献する時だ、日本、日本語の価値を自覚し、自信を持って発信せよ、という思いを特に晩年は強くお持ちになっていた。

(朝日新聞クロスサーチ2021年02月24日 夕刊)

- (11) 気を取り直した勝沼は直ちに行動を開始した。もはや結果を恐れている時ではない。

(BCCWJ 吉野道男 (著) 『熱球児』2002)

- (12) 消費より貯蓄に回っているという指摘もある。当初の想像以上に長期戦になりそうな中、そろそろ、お金の届け方を工夫する時ではないか。

(朝日新聞クロスサーチ2021年04月08日 朝刊)

「今や」「そろそろ」「もはや」のような、「発話時の現在」が含まれる近未来を表す表現の共起も見られる。すなわち、「今や」は、ある変化がすでに起こっていることを背景に「今」を捉えるものであるし、「そろそろ」は、何らかの出来事が発生することが考えられる時間であることを表す。「もはや」も、状況がある段階に至っているという意味を表す。これらの成分との共起は、「時だ」では事態の実現、「時ではない」では事態の中止が必要でかつ喫緊であることを表す。

このように、発話時まで続いている場面・状況を表す文脈、大きな意味でいう「現場」が、「時だ」「時ではない」という判断の前提或いは契機となり、それらが表す評価的意味において重要な役割を果たしている。その現場に適合した行動を要求したり、或いはそれまでの状況に変化や改善を求めたりする場合など、「時だ」によって事態の実現を提唱し、「時ではない」によって事態の中止などを主張する。このように、「時だ」「時ではない」の文末用法には場面・状況の説明という特定の文脈に支えられると言えるのではないだろうか。

逆に、文脈が全く無い場合には、「水を飲む時だ」「水を飲む時ではない」などは成り立たないわけではないが、評価性含意のある構文として捉えにくいように思われる。「時だ」「時ではない」は事態の選択に対するコメントと表す以上、それに対応する事態選択が必要であるというような文脈が全く現れなかったり、想定できない場合にはそもそも成り立たない。いきなり「水を飲む時」「水を飲む時ではない」と言っても、単なる「水を飲む時間であるかどうか」の意味しか表さず、評価性含意として読み取れにくいと思われる。これは森山(1997)で指摘した選択とは常に主題要素が文脈的に存在していることから説明できる。つまり、何かにとって何かが必要であるという必要性を説明する構造でないと、「時だ」が出現するまでの情報が欠如することになって、普通は使わないのである。

ここまでは「時だ」「時ではない」は事態の選択についてコメントを表す表現で、現場を重視することを述べてきた。では、「時だ」「時ではない」によって取り上げられる事態とはどんな事態なのか。

#### 4. 「時だ」「時ではない」の前項事態のコントロール性

「時だ」「時ではない」はいずれも事態の選択へのコメントを表す表現である。「時だ」は「動詞ル形+時だ」のように肯定の形で積極的に適切な事態の選択を表し、話し手が何らかの決心・決断を表明したり、主張をしたり、行動を呼びかけたりする。話し手の意思表示の表現として、その前接部分に意志動詞しか来ない。一方、「時ではない」は「動詞ル形+時ではない」「動詞テイル形+時ではない」の両方の形によって、事態が不適切であると指摘する意味を表す。この場合、その前接部分には、意志動詞がくる場合が圧倒的に多いが、

- (13) 「市場という魔物と向き合い、使いこなせないままではじり貧になる」と斉藤惇東証社長は危機感を募らせる。ホリエモンの時代への不可思議な郷愁にひたっている時ではない。

(朝日新聞クロスサーチ2012年02月19日 朝刊)

- (14) 昨年の千葉大会で優勝した日本人パイロット、室屋義秀選手(44)は今大会を前に「完全にレースモード。(昨年の)感慨にふけている時ではない」と話した。

(朝日新聞クロスサーチ2017年06月03日 朝刊)

- (15) 「家繁昌こそ大切なことで、恋に心を奪われている時ではないだろう」と金次郎は忠告している。

(BCCWJ 新井恵美子(著)『江戸の家計簿』2001)

のように、無意志動詞や受け身がまったく現れないわけではない。ただ、無意志動詞と言っても、コントロール性のある事態を表すものしか前接しないといえるのではないだろうか。つまり「X時ではない」において、X事態の継続がコントロール可能のものでなければならない。上記の例で「郷愁にひたっている」「感慨にふけている」「恋に心を奪われている」それぞれの事態の継続がコントロール可能のものであるため、「時ではない」が成り立つのである。

逆に、人間の関与がまったくない自然現象を表す無意志動詞の場合は、

- (16) \*雨が降っている時ではない。(作例)

- (17) \*雨が降る時だ。(作例)

のように、事態の継続がコントロール不可能で、「時だ」「時ではない」が成り立たなくなる。基本的には、その選択が人間の意志によってコントロールできる事態でなければならないと言えるだろう。森山(1997)は事態選択に対するコメントの表現において、その事態の選択に関わる当事者(人間)が語用論的に考えられ、その存在が必要で、当事者の存在が考えられない場合は不自然になると指摘している。「時だ」「時ではない」のような事態の選択を問題にする表現において、その事態がコントロール不可能の自然現象等の場合、そもそも選択自体が不可能になるため、選択に対するコメントという次の段階は無論ありえないのである。

こうして「時だ」も「時ではない」もコントロール可能の事態を取り上げて、その選択、さら

にその実現の必要性について評価するのである。

## 5. 「時だ」の必要性—「べきだ」との比較を通して

ここで、評価モダリティの専用助動詞「べきだ」と比較することによって、「Xスル時だ」の表す必要性を見ていく。

### 5.1 「Xスル時だ」はなぜ必要性を表すのか

「時だ」は今の状況に一つの事態に価値を付与する意味である。その事態が未実現のものであり、価値あるものと評価し、その実現が必要であると主張する。「時だ」によって事態実現の必要性を表せるのは、やはり特定の現場・状況とそこで要求される事態によると考える。

現場・状況に適合する事態が実現していない場合、その実現を促す。例えば、

- (18) 命にかかわる危険は大人が取り除く義務がある。今こそ事故を教訓にして国の安全指針を実行に移す時ではないだろうか。

のように、「命にかかわる危険は大人が取り除く」という現状に適する事態が実現していない現状で、事故の発生を契機に、「国の安全指針を実行に移す」の実現が必要かつ緊急性の高い事態となった。このように「時だ」によって現場の状況に適合する事態の一つを選択して、その実現を主張するのである。また、発話時にある特定の状況は理想的ではないため、それを改善するために、事態の実現が必要となる。例えば、

- (19) 労務管理を現場にゆだねる対策は効果が限定的だ。ここは政治や行政が動く時だ。

((9) 再掲)

のように、「対策は効果が限定的だ」から、現状の改善が要求されるようになる。そのために「政治や行政が動く」という事態の実現が必要であると話し手は主張する。

こうして「時だ」は現場の状況に適合する一つの事態を選択し、それが「今すべきこと」と肯定に価値評価を表す。

### 5.2 「べきだ」との比較からみた「時だ」の必要性

#### 5.2.1 「今」へのコメントを表す「時だ」

ここで、「時だ」と「べきだ」を比較する必要があるだろう。

- (20) a. 君は議長を辞任すべきだ。(作例)

??b. 君は議長を辞任するときだ。(作例)

のように、bは実際「今が辞任する時だ」「今が辞任すべきだ」という意味になる。つまり、事態実現のタイミングは「今」に限定され、まさに「今がその時である」と強調する。それに対して、aの「べきだ」は単なる事態の実現そのものが妥当かどうかを問題にして、そのタイミング

は必ずしも今だというわけではない。また「君は議長を辞任する時だ」となると、人間の「君」と時間の「時」と同一関係にあることになってしまい、不自然になる。「今は～時だ」のように、主語と述語のカテゴリーを「時間を表す」ものに一致させる必要がある。

第3節でも述べたように、「時だ」においては現場性が重要である。元々「今は～時だ」のような主語が整っている形で、今が事態を実現するタイミングであると主張し、現在の状況に応じて、ある事態の実現が必要であると評価するのである。「べきだ」に比べて「時だ」は事態実現のタイミングを「今」と主張し、あくまで「今」の状況に対してコメントするのは特徴的と思われる。

この点については、以下

(21) 天気が悪くなれば、中止すべきだ。(作例)

(22) \*天気が悪くなれば、中止する時だ。(作例)

のように、仮定条件と共起できるかどうかからも確認できる。「時だ」はあくまで現場<sup>(12)</sup>の状況に対するコメントであり、「天気が悪くなれば」のように、仮定条件によってその状況を発話時の現在でない時間に設定されると不自然になる<sup>(13)</sup>。それに対して、「べきだ」はそうした制限はなく、単に事態の実現の必要性・事態の妥当性を問題にし、その事態の実現が必ずしも「今」の時点に行われるという含意はない。

一方、「時だ」の否定形式の「時ではない」も、

(23) 今、国民は黙している時ではない。語るべきである。行動すべきである。「不正は不正」とし、「悪は悪」とすべきである。この国の未来は、国民自身が作らなければならない。

(朝日新聞クロスサーチ1996年08月02日 朝刊)

のように、動詞テイルによって、発話時の「今」の場面・状況における当該事態（「する時ではない」の未実現事態であれ、「ている時ではない」の現実事態であれ）に対して否定的価値評価を表すことがわかる。

### 5.2.2 「時だ」における事態実現の必要性の度合い

「時だ」には動詞ル形、スル形の他に、「べき時だ」「なければならない時だ」のように、モダリティ形式が前接する例文も見られる。これらの前接するモダリティ形式から「時だ」が表す事態実現の必要性の度合いを見ていきたい。

(24) 派遣実績の積み上げや、対米配慮のために自衛隊を出すという発想から、もはや脱すべき時だ。

---

(12) 前述したように、「時だ」は極めて厳密な意味での現場というより、発話時の今、近未来の状況に注目すると言える。

(13) 「その時は～時だ」のように、「その時」等のような表現によって事態実現に一致する時間に設定し直す場合は、「その時」はその事態実現にとって「現在の状況」と見られる。

(朝日新聞クロスサーチ2019年04月03日 朝刊)

- (25) 一般にはあまり浸透していない。こういうものの一般への警告の普遍化を図らなければならない時だろう。 (BCCWJ Yahoo! ブログ2008)

のように、「べきだ」に言い換えられる「べき時だ」「なければならない時だ」がある。朝日新聞クロスサーチより抽出した文末用法「時だ」318例のうち、このようなモダリティ形式が前接する「時だ」は「べき時だ」67例、「しなければならない時だ」4例、「しないといけない時だ」は1例である。朝日新聞クロスサーチ「時ではないか」488例中「べき時ではないか」160例、「しなければならない時ではないか」7例、「でもない時ではないか」2例、「なくてはならない時ではないか」1例、「てよい時ではないか」1例が見られた。一方、BCCWJより抽出した文末用法「時だ」110例のうち、「べき時だ」31例、「しなければならない時だ」10例、「なくてはならない時だ」2例、「しないといけない時だ」は1例である。本稿で使用するコーパスから抽出した例文を見る限り、いずれも「ほうがいい時だ」の例文は見当たらなかった。このように、前接するモダリティ形式の意味から「時だ」の表す事態実現の「必要性」を説明できると思われる。

森山 (1997) (2000) は「別選択許容テスト」を用いて、

\*しなければならないが、しなくてもいい。

\*しなくてはいけないが、しなくてもいい。

したほうがいいが、しなくてもいい。

(本来は) するべきだが、しなくてもいい。

のように、「なければならない」と「しなくてはいけない」には他の選択を付加することができないことから、一つの事態だけに価値付与する「絶対価値付与型」、「べきだ」と「ほうがいい」には選択余地があり、相対的価値付与型としている。また、高梨 (2010) は「べきだ」と「ほうがいい」と同じ「妥当類」<sup>(14)</sup>としてまとめている。いずれも「べきだ」と「ほうがいい」を事態実現の必要性の度合いを区別していないように見える。が、「べき時だ」があるのに対して「ほうがいい時だ」が見られないことから、実際「べきだ」と「ほうがいい」は事態実現の必要性において性格を異にするのではないかと考える。ここで、「必要だ」に置き換えられるかどうかを通して上記の問題を検証する。具体的には、

A しなければならない。A することが必要だ。

B すべきだ。B することが必要だ。

\*C するほうがいい。C することが必要だ。

のように、森山 (1997) (2000) で絶対価値付与型に分類された「なければならない」は「す

(14) 高梨 (2010) によると、評価のモダリティ形式は意味によって、事態の「肯定評価、妥当、必要、不可避」という評価を表す「必要妥当系」、事態が必要でないという評価を表す「不必要系」、事態が許容されるという評価を表す「許容系」、事態が許容されないという評価を表す「非許容系」に分類できる。

ることが必要だ」に置き換えることが可能で、事態の実現が必ず要求され、必要性の度合いが高いと言える。一方、「べきだ」と「ほうがいい」は同じ相対的価値付与型であるが、前者は「することが必要だ」に置き換えることが可能であるのに対して、後者は置き換えられない。つまり、事態実現の必要性の度合いに相違点があると言える。

これに関連するのは、森山(1997)(2000)で指摘したように「べきだ」には「しなくてもいい」が後続できることである。一方、「必要だ」に置き換えられることが可能で、「今すぐ～すべきだ」のように事態実現の必要性の度合いが高い場面でも言える。そのため、「べきだ」は、事態の別選択が許容されない「なければならない」ほど高くないものの、やはり事態実現の必要性が高いと言えるのではないだろうか。したがって、同じく必要性を表す「時だ」に前接して、「べき時だ」の形が成り立つのである。

それに対して、「ほうがいい」はただ事態の実現が望ましいと評価するだけで、今という現場・状況における事態実現の必要性を問題にせず、「することが必要だ」まで言い切れないところがある。よって、事態実現の必要性を表す「時だ」に前接しないのも納得できる。

このように、前接する事態選択モダリティ形式の表す必要性から、「べき時だ」「なければならない時だ」のような表現が見られ、「ほうがいい時だ」が見られない原因がわかる。「発話時の現在の状況における事態実現の必要性しか取り上げない「時だ」の表す事態の必要性は、一般状況・特定場面の両方における事態実現の必要性を表せる「べきだ」と、必要性を問題にしない「ほうがいい」の間に位置付けできるのではないかと考える。

ここで、「時」と同様に時間を表す表現で、文末にも出現できる「頃だ」にも触れたい。本稿で取り上げる「時」はよく「(今は)～時だ」の形で、事態の実現のタイミング、必要性を表す。「時だ」によって、話し手は自ら積極的に「時」の表す事態内容を規定し、価値評価を行うのである。また、「時だ」の前項はコントロール可能な事態であることからわかるように、「時」が表す事態実現の時間というのは、人間の意志が大きく関与し、もともとコントロールすべき時間として限定されるのである。「時だ」「べき時だ」等の形が多く見られるのもその現れの一つと言えよう。

一方、「頃だ」は話し手はその時間に事態が起こってくるのをただ観察しているだけである。「時だ」のように時間の内容を規定せず、「子供が帰ってくる頃だ」のように、「子供が帰ってくる」という事態の発生を描写するのである。「頃だ」は事態の発生に関与せず、視点を外部的なものにして、事態実現の時間へのコントロールがまったくないと思われる。

## 6. 終わりに

本稿では「時だ」「時ではない」の意味用法を考察し、その特徴はそれぞれ「事態の実現が望ましい、必要である」「未実現事態・現実事態が不適切である」という価値判断にあると論じた。では、「時だ」「時ではない」の評価モダリティにおける位置づけをどう考えればよいのだろうか。

## 時間を表す名詞の文末用法

高梨（2010）の分類によれば、「時だ」は事態の実現が必要かつ望ましいと評価を表すことから、「必要妥当系」に属すると言えよう。一方、「時ではない」は「テイル時ではない」の形で事態が実現していることへの否定的評価、「する時ではない」の形で実現・未実現の事態が望ましくないと意味することから、「非許容系」に分類できると言える。しかし、「時だ」にしる「時ではない」にしる、従来の評価モダリティ形式に比べて、文法化の程度が低い面は否めない。形式上文法化が進んでいなく、「時」の語彙的意味がまだ生きている点も無視できない。従って、評価モダリティの周辺形式として位置づけるほうが妥当のように見える。

また、「時だ」は英語の「It's time to～」と「It's not time to～」という表現の訳文翻訳表現としての出自をもつ可能性もあるし、中国語にも「時だ」「時ではない」に類似する表現があるため、今後の課題として、この表現の共通点及び相違点をめぐる対照研究も期待できる。

### 使用データ及び用例出典

現代日本語書き言葉均衡コーパス（BCCWJ）中納言 2.6.0データバージョン2021.03  
朝日新聞クロスサーチ（1985～2022.07）

### 参考文献

- 井島正博（2006）「否定疑問文の語用論的分析」『日本語文法の新地平2 文論編』益岡隆志 野田尚史 森山卓郎編 pp.155-177, くろしお出版。
- 王其莉（2016）「日本語の「べきだ」と中国語の“应该”」『判断のモダリティに関する日中対照研究 ひつじ研究叢書〈言語編〉第138巻』pp.75-98, ひつじ書房。
- 高梨信乃（2006）「評価のモダリティと希望表現一タ形の性質を中心に一」『日本語文法の新地平2 文論編』益岡隆志・野田尚史・森山卓郎編 pp.77-97, くろしお出版。
- 高梨信乃（2005）「評価のモダリティを表す助動詞「べきだ」」神戸大学留学生センター紀要11, pp.1-15, 2005-03.
- 高梨信乃（2010）『評価のモダリティ 現代日本語における記述的研究』くろしお出版。
- 田中寛（2012）「時の“特化”を表す名詞述語文一（～時だ）、〈昨今だ〉などを例に」日本語／日本語教育研究 [3] 2012, pp.225-243日本語／日本語教育研究会（編）ココ出版。
- 寺村秀夫（1983）「時間的限定の構文の機能一「トキ」の場合」『副用語の研究』pp.260-266, 明治書院。
- 寺村秀夫（1991）『日本語のシンタクスと意味Ⅲ』くろしお出版。
- 日本語記述文法研究会編（2008）『現代日本語文法6第11部複文』くろしお出版。
- 益岡隆志（2006）「「～タイ」構文における意味の拡張一願望と価値判断一」『日本語文法の新地平2 文論編』pp.63-76, 益岡隆志・野田尚史・森山卓郎編 くろしお出版。
- 森山卓郎（1989）「認識のムードとその周辺」『日本語のモダリティ』くろしお出版。
- 森山卓郎（1992）「価値判断のムードと人称」日本語教育77号 日本語教育学会。
- 森山卓郎・安達太郎（1996）『日本語の文法 セルフ・マスターシリーズ6 文の述べ方』くろしお出版。
- 森山卓郎（1997）「日本語における事態選択形式一「義務」「必要」「許可」などのムード形式の意味構造」国語学188集, pp.110-123
- 森山卓郎（2000）「基本叙法と選択関係としてのモダリティ」『日本語の文法3 モダリティ』岩波書店。